

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

REZAEE Alireza

論 文 題 目

罵倒語を中心としてみた日本文化における「男らしさ」の研究  
－中東・地中海社会との比較から－

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 櫻井龍彦

委員 名古屋大学 教授 藤村逸子

委員 名古屋大学 准教授 西村秀人

# 論文審査の結果の要旨

## 1, 本論文の構成と概要

本論文は、言語人類学と歴史民俗学の観点から、罵倒語を通して考察した「日本人論」、「日本文化論」として試みられたものである。

言葉にはそれを使用する民族集団の世界観、価値観が反映されている。なぜなら言葉の成立には、その民族集団の基盤となる文化的、宗教的、歴史的な要因と深い関連があるからである。

本論文は罵倒語とその成立を可能にする文化環境を問題とする。罵倒語のなかでも特に性的罵倒語に着目し、日本人の性意識や男女関係のあり方から「男らしさ」とは何かという問題を、背景にある日本社会の歴史文化的環境をふまえ、キリスト教、イスラム教文化圏との比較でその特徴を論じようとした意欲的かつ独創的な研究である。

本論文は全部で9章から構成されている。

### 1), 第1章では、研究の目的、意義、先行研究の概要、本論文の構成を述べる。

性的罵倒語は性器、性道徳、性行為に関わる語彙や表現で構成されるが、日本語には性行為を素材にした罵倒語が見あたらない。それは中東や地中海諸言語と対照すれば明らかであるが、では一体なぜ日本語の罵倒語は性に比重が置かれていないのか、それは日本人のどのような心意、日本文化のどのような特徴を示すものなのか。この仮説を検証するために、筆者は「ファルス」という概念を提示し、「犯す」をモチーフにした性的罵倒語のもつ言葉の攻撃性、防御性といった象徴的性格を分析し、ある社会における「男らしさ」に対する捉え方などを考察することを述べる。

2), 第2章では、罵倒語の一般的特徴を文化や宗教との関係で説明し、日本語における罵倒語のあり方について論ずる。言葉の成立を理解するには、その背後にある社会や文化への理解が不可欠であるが、日本語の罵倒語に宗教的な冒瀆に起源を發したものがほとんどないのは、絶対的な神と宗教的な道徳の規制が不明瞭であることによるという点を中東社会や英語圏社会と比較して説明している。日本語には排泄物、排泄行為あるいは身体的欠陥に関する罵倒語は豊富に存在するが、一方で他言語と比べて、宗教や性的な事柄は少ない。このことは社会における神聖観念、性道徳の厳格さの度合いの違いを反映しており、同じ一つの用語でも、言語によってその激しさの程度や集団が抱くイメージが異なることを指摘する。

3), 第3章では、性的罵倒語の分類にあたって、脅迫含意の有無で大別する枠組みを提示したあと、罵倒語における主体の問題に触れ、日本語には性行為を素材にした罵倒語が見られないのはなぜかという疑問に対する従来の説を述べる。それは日本人は古来、性に対してはおおらかであった、という通説であるが、筆者はさまざまな実例から、日本人のこのおおらかさを認めつつも、罵倒語の中に性的なものが少ない原因を直接的にそのおおらかさに求めることには疑問を抱く。そこで筆者は「ファルス」という概念とそれが象徴する「男らしさ」の概念から探求する視点を提示する。

4), 第4章では、「ファルス」という概念がいかに関係する「男らしさ」という概念と結びつき、それがどのようにして性的罵倒語に反映されているかを論述する。そこでまず人類の暴力性、攻撃本能を人類史的に振り返り、それを男女の性関係においたとき、男の攻撃性と同義であることを述べ、それを罵倒語との関係で論ずるにはファルスの象徴的意味を捉えることが有効であると主張する。ファルスは「犯す」ことと「犯される」こととの対立を物語る概念であるが、自分が支配や権力の文脈で犯す側

## 論文審査の結果の要旨

であるためには、犯されることを忌避しなければならない。そこでファルスは攻撃性ととも防御性の象徴ともなり、自分の身と身内の女を守ることが男らしさの指標となる。そのことを中東・地中海地域のキリスト教、イスラム教文化圏における同性愛や男女関係から詳述し、性的罵倒語の中にファルスと男らしさの相関がどのように表現されているのかを述べる。

5)、第5章では、中東社会において、ファルス概念がどのように男女関係のなかで現出しているかを具体的にのべる。前章で筆者はファルス概念が、男がよその男と彼らの身内の女を攻撃するだけでなく、自分あるいは身内の女をよその男の攻撃から守護することで男らしさを実証するという二面性(攻撃性と防御性)を指摘した。そこで本章では、この中東社会で「ゲイラト」という情動に着目し、それをファルス恐怖症と理解して、この情動がいかに「男らしさ」の概念と結びつくかを事例分析によって示している。中東社会ではなぜ人びとが身内の男以外の男を攻撃力のあるファルスとみなすのか、なぜ男たちは異常なほど身内の女の行動に敏感なのか、またなぜ女たちもこのような敏感さを容認し身内の男に従うのかが、この詳細な分析から明らかになる。

6)、第6章では、前章でみた中東・地中海社会における攻撃性と防御性を象徴するファルス概念が日本社会で通用するか否かを検証する。そのためにまず日本文化のなかの男色、処女性の歴史を概観し、古代から近世にいたるまでの日本人の男女関係のあり方を見通したうえで、ファルスと男らしさの日本的展開を論ずる。日本では祭礼、民俗、浮世絵などからわかるように、ファルスは豊穰祈願や魔除けなどの信仰の中で、呪術的な力をもつとされる性器崇拝の対象であり、攻撃性とは縁遠い。また夜這い、雑魚寝、盆踊りといった風習にみられる男女関係から、日本では中東、地中海地域と違って男が身内の女を保護・管理する、ひいては「種」の保護という考えが希薄であったと指摘する。

7)、第7章では、キリスト教、イスラム教文化圏で性が権力の象徴として捉えられていることを述べる。キリスト教社会ではアダムとイヴの物語以来、性は悪いものとみなされ、性的な「快楽」は否定された。ファルスは権力の象徴として女を支配・征服する手段であり、性交は男女相互の快楽のためではなく、男の所有権を主張するものであった。一方イスラム社会では性は罪悪視はされないが、強い抑圧はあり、女は男に従属すべきものという点では、男の優越性、支配性は定まっていた。こうした男女の性関係や婚姻の理念をそれぞれの聖典の教義などから説明している。

8)、第8章では日本における古代から近代までの性意識を考察し、キリスト教、イスラム教文化圏と対照的に、日本文化では性やファルスは「権力」の象徴ではなく、「快楽」の手段であったこと、男色や男の女装などの嗜好からみてもわかるように、ファルスが「犯す」・「犯される」ことの対立指標とならないことを論述する。歴史的にみれば中世以前、日本人は性に対して開放的であったが、仏教や儒教の浸透により武士社会になると、男が「権力」の象徴として性を独占・支配していく。しかしマジョリティ社会の農山漁村では、近世においてもかなり自由な性風土を維持し、「快楽」が強調されていた。こうした考察を祭礼、女装、遊郭、西欧宣教師の記録、神道・仏教・儒教など多種多様な資料を駆使して進めている。

9)、第9章は総括である。日本文化では古来、ファルスは支配・権力という意味あい希薄で、女陰と合わさった男女和合による生産・豊穰の象徴であった。したがって、そこには男の犯す能力や欲望という「攻撃性」や犯されぬための「防御性」がない。キリスト教・イスラム教世界では、男女の

## 論文審査の結果の要旨

対立あるいは男同士の関係のなかで犯す側と犯される側の対立が主張されてきたが、日本では男女和合による性意識が強く、男色にも厳しい規制がないため、ファルスは権力よりは快樂の意味合いが強かった。日本語のなかに性的罵倒語が見られないのは、このような文化的背景から説明できる。結局、日本では性に関する意識や習俗などからみる限り、「男らしさ」には中東・地中海地域のように、女をめぐる男同士の競争関係からは定義できないのである。

### 2. 本論文の評価

本論文は以下の点において評価できる。

罵倒語の研究は意外と少ない。特に性的罵倒語となると、その反道義性や品格的劣等性に心理的抵抗があるためか研究対象としては避けられる傾向がある。筆者はこの性的罵倒語に正面から向きあい、言葉をとおして文化を読み解く言語人類学的な研究と文化の相対化によってある文化の特性を浮き彫りにする比較文化論的な研究を試みた。

本研究は、「日本語にはなぜ中東や地中海の諸言語のように、相手自身、あるいは相手の身内の女性に対して「犯す」といった強引な性行為を示唆する用語を使った罵倒語が見あたらないのか」というユニークな問題設定から出発している。

この問題を解明するために、まず筆者は「ファルス」を有効な概念として提示し、その権力性に注目する。ファルスは男の「攻撃性」と「防御性」を象徴するが、この場合、「防御性」とは「攻撃性」の裏返しの強調である。つまり一般には「攻撃性」は、男が女を犯す能力や欲望によって顕示されるとするが、筆者は攻撃性の矛先は女ではなく、男であるという。よその男たちのファルスの攻撃性に対し、自分の攻撃性の優越性を明示することで、それではじめて自分と身内の女を防御できることになる。つまりこの防御性が発揮、実証されてこそ真の権力の象徴となり、男らしさの獲得につながる。この攻撃性の裏面にある防御性への着目がまず本論文の新しい視点として評価できる。

「ファルス」や「男らしさ」をこのような観点から見ると、キリスト教・イスラム教文化圏でなぜ性的罵倒語が世俗的に大きな位置をしめるのかが理解できるが、ではそれを視座にして、日本文化のなかでファルスの権威性はいかなるものであるのか、それが果たして「男らしさ」の象徴となるのか、性的罵倒語の有無についてその観点から説明が可能なのか、という課題につなげていく。

筆者の結論は、日本語のなかに「犯す」をモチーフにした罵倒語が見あたらないのは、日本文化では性や性行為を権力・支配のメタファーで捉える傾向が弱く、性行為を通じて男と女、あるいは男同士が対立する意識が希薄であるというものであり、そのことを内外の大量の資料を使いながら、キリスト教・イスラム教文化圏との比較によって説得的に論述している。本論文は「文化の解釈」の試みであるため、筆者独特の「視点」による「解釈」が全方位を包括しているとは言えないとしても、大量の資料から状況証拠を帰納的に引き出した新鮮かつ独創的な解釈であるという評価は与えることができるだろう。

本論文は設定した問題（仮説）を段階的に解決しながら、その上にまた新たな問題と解決を積み上げていく周到で忍耐強い思考に裏打ちされた論文として評価できるが、以下のような若干の問題点もある。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、性的罵倒語を中心にして、日本文化の中の「男らしさ」についてキリスト教・イスラム教文化圏との比較において考察するものであった。その長い論述のなかで、さまざま角度から、日本文化では、キリスト教・イスラム教文化圏のようなファルスの「攻撃性」と「防御性」が象徴する権力を指標として「男らしさ」を計ることはできない、と述べているが、では別の指標としてなにが日本文化の「男らしさ」を示すものなのか。この点の考察が、比較の論述による非キリスト教・イスラム教文化圏的「男らしさ」の解明に比べて貧弱であるのは否めない。

最後の9章で、日本人の没我的勤勉さ、自己滅却的態度、義務への献身、権威への忠誠、集団的価値と私的利害の調和などの実現による理想的な男性性に言及するが、これらの徳目自体はすでに指摘されていることでもある。しかしそういった徳目にも、「犯す」「犯される」という象徴的概念で捉え直す視点の意外性は認められるものの、全体としては日本文化のなかの「男らしさ」の指標について、質的にも量的にももっと十分な考察がほしいところである。

本論文は広義の日本文化論としても評価できるものであり、それを可能にしたのは大量の日本語文献の解読にある。非漢字文化圏の留学生がこれだけの文献資料にあたり、それを理解し、自分の視点で再編成し表現する能力は並大抵のレベルではない。しかし古典的な文献、外国人宣教師の日本滞在記などには参考とした研究書からの引用によるものが多く、今後は自ら原典の発掘にあたる努力が望まれる。

こうした問題点は残すものの、全般的にみて本論文の価値や独創性をそこねるものでは決してない。

### 3. 評価結果の判定

上記3名の委員からなる審査委員会は、平成25年3月19日、本審査委員会を開催し、博士課程(後期課程)のあるべき水準を満たしている、オリジナルな成果を含んでいることなどを確認・評価した。

よって本論文は博士(学術)の学位に値するものと判断する。